

# コロナ禍の東京五輪はいかに語られたか —テレビニュースのキャスターコメント分析から—

## Media Coverage of the 2020 Tokyo Olympics: Analysis of Broadcast Comments on TV News during the Covid-19 pandemic

深澤弘樹  
Hiroki FUKASAWA

### 要約

本稿では、コロナ禍で開かれた2020東京五輪のマス・メディアの報道に焦点を当てる。とりわけ、ニュースキャスターのコメントに注目して彼／彼女らがどのような言葉を用いてコロナ禍の五輪を表現したのかを明らかにする。開催時期は、感染状況が深刻度を増していた頃であり、コロナの世界と五輪の世界がパラレルに存在した(山腰, 2021)。山腰はこの時期のメディアの報道姿勢は五輪の世界に傾き、十分にコロナの実情を報道しきれていなかったと批判する。本稿では、この考え方を援用し、実際にキャスターがいかに語ったのかを国内の主要ニュースを分析することで明らかにする。その際の分析枠組みは感情労働であり、キャスターがどのような認識枠組みを感情規則として内面化し、語っていたのかを探る。この時期、連日過去最多の感染者を記録するなか、五輪をこやかに伝えるキャスターには「二枚舌」「手のひら返し」などと批判が浴びせられた。分析を通して、世論を敏感に感じ取ったキャスターが開会前までは国民の不安を代弁し、政府に適切な対応を要求していたものの、開会後は、メダルラッシュのなかで従来どおりの感動の物語を伝え、選手の応援団と化していたことが明らかになった。今回の五輪ではコロナ禍という特殊事情があったからこそ「共感」重視に拍車がかかり、キャスターは選手から聞かれた開催への「感謝」の言葉に寄り添って人々の共感を誘い、一体感を醸成する役割を果たしたといえよう。

Keywords : テレビニュース、キャスターコメント、感情労働、感情規則、五輪報道  
TV news, broadcaster's comment, emotional labor, emotional rule, Olympic coverage

## 1. はじめに

2020年からの新型コロナウイルスによるパンデミックは世界中に甚大な影響をもたらし、東京オリンピック・パラリンピックは延期を余儀なくされた。1964年以来の東京大会は2020年3月24日に1年間の延期が決定され、2021年7月に感染が拡大するなかで開催された。反対の声が渦巻き、当初掲げられた「復興五輪」の理念はかすんだほか、菅首相（当時）は「コロナに打ち勝った証」として五輪開催を位置づけたものの、国民の受け止めは冷ややかであった。さらには無観客開催となったほか、準備段階から直前まで不祥事続きでまさしく異例づくめの大会となった。

批判の矛先はメディアにも向けられ、広告会社・電通による世論誘導やメディア支配などに厳しい目が注がれた。評論家の本間龍は、日本の全国紙すべてが五輪スポンサーとなり、五輪に対して批判的な報道ができなくなった点を問題視する。さらには、新聞社とクロスオーナーシップで結ばれた民放キー局も五輪の翼賛体制に組み込まれていると指摘している（本間，2021）。後藤逸郎はこの状況を「大政翼賛会」と表現し、「日本の言論・報道の自由を損ね、国民の信頼を失った」とまでいう。また、五輪期間中の報道では、新型コロナ下での五輪開催リスクの報道は影を潜め、メダルラッシュを嬉々として伝えていたと後藤は述べ、その姿勢は「手のひら返し」と揶揄された（後藤，2021: 29）。

本稿では、以上のような批判を受けている東京大会のうち、とりわけ、オリンピック開催中の報道について、ニュースキャスターの言葉に注目して検証する。その際に山腰修三が提示したコロナ禍におけるパラレルワールドという考え方を援用する（山腰，2021）。山腰は五輪の世界（あちら側）とコロナの世界（こちら側）の両方が五輪期間中にパラレルに存在し、両者は分断されていたという。こうしたなか、両者をつなぐ窓としての役割を果たしたのがメディアであるとし、「メディア側はどちら側の世界に立っていた」のかを問う。

本稿では山腰の問いを踏まえて、テレビニュースが五輪開幕前、大会中、大会後に五輪をいかに意味づけたのかについて、キャスターのコメント、振る舞いに注目して分析を進める。コメントに注目する理由は、キャスターコメントが視聴者の準拠枠組みになることが指摘されており、世論形成における影響力

が大きいと考えられるからである。また、本稿では、共感が重視される社会において、キャスターが視聴者に寄り添う姿勢に基づいてコメントし、そのふるまいが感情労働の側面を持つことを重視する。五輪期間中、彼ら／彼女らの振る舞いを規定していたもの（感情規則）は何だったのだろうか。

以上の問題意識のもと、感染者数の増加で不安が募る世論を後ろ盾に批判的な論調で伝えていた開幕前までの言説から、開幕後に従来通りの「勇気をもらった」「感動をありがとう」に代表される応援報道にいかに移行したのか、その理由は何かを主要テレビニュースを分析対象として明らかにする。

## 2. メディアオリンピックの機能とキャスターコメントの役割

### (1) メディア・イベントとしての五輪とナショナリズム醸成

これまでオリンピックとメディアの緊密な関係性が研究対象になっており、とりわけオリンピックは典型的なメディア・イベントとして語られてきた。メディア・イベントとは、ダヤーンとカツツによって提起されたもので、「大組織によってセットされメディアによって事前宣伝される通過儀礼的な重要行事や巨大スポーツイベント」（渡辺，2019: 312）を意味する<sup>1</sup>。このイベントでは、ナショナリズムの醸成や社会を統合する働きが強調され、1964年の東京五輪では、敗戦から約20年を経た日本が国際社会で存在感を示すきっかけとなり、高度経済成長期の日本のプレゼンス向上に大きく寄与したとされている<sup>2</sup>。

浜田幸絵が「マス・メディアがオリンピックを大きく報道してこなければ、オリンピックが現在のような社会的影響力をもつことはなかった」（浜田，2020: 37）としているように、これまで五輪イメージの形成にオリンピック報道は大きく寄与してきた。浜田によると、テレビ登場以前の1932年のロサンゼルス五輪の頃から、メディアは日本選手のことを「我が選手」と呼び、「日の丸」や「君が代」を強調するなど、次第に人々の国民意識に働きかけるものへと変化したという。そうしたオリンピック報道のナショナリスティックな論調は、その後もほぼ変わっていない（浜田，2020: 45）。

メディアには「想像の共同体」を構築する働きがあり、2021年開催の東京五輪報道もその働きを担った。五輪開催前に、阿部潔は東京大会での主催者側の

決まり文句は「すべての日本人＝『みんな』」だとし、個々人を同一化して動員していると指摘したうえで、以下のように述べる。

大会が開催された暁には、国を挙げてオリンピックを盛り上げていこうとする空気の高まりのもとで、一人ひとりの<わたし>を超えた<わたしたち＝みんな>の共感が、さまざまなかたちで演出されるだろう。……とらえどころのない情動の共同性が醸成され、そこに潜む独自の力＝パワーが、共振する<わたしたち>をイマドキのナショナリズムのその場かぎりの担い手へと作り上げていく。(阿部, 2020: 223-224)。

阿部は、東京五輪直前の日本のナショナリズムについて概観し、現在の「ナショナルなもの」は多様かつ複雑化している点を指摘した。どういうことか。日本ではかつて香山リカが「ぶちナショナリズム」と表現した自己愛的なナショナリズムの気分や人種差別的で排他的な暴力性が併存する。日本では「ナショナルなもの」が主義や信条から成り立っているわけではなく、感覚的な心情や雰囲気として人びとに受け止められているという。阿部はこうしたナショナリズムを変幻自在な「心情としてのナショナリズム」と表現している(阿部, 2020: 199-201)。

今の日本ではこうしたナショナリズムは「当然のごとく」受け止められている。それは「ナショナリズムとの関わりを通して個人を超えた<わたしたち>への同一化の欲望が生み出され、同時に満たされているから」である(阿部, 2020: 201)。現在は、個人よりも集合としての「わたしたち」への同一化、つまり、心情の共同体への同一化を通して「自分と同じ<日本人>という仲間との共感や連帯感」が重視される。そのダイナミズムは内向きな自己愛であれ、攻撃的な排外主義であれ変わらない(阿部, 2020: 202)。

以上の記述はコロナ禍の前の指摘であるが、「<わたしたち＝みんな>の共感」はコロナ禍だからこそ、つまり、無観客という特殊な形態での開催だったからこそ、より強まる傾向もみられたのではなからうか。この点について、本稿ではキャスターの語り(コメント)に注目して「私たち＝みんな」という表

象がテレビニュースにおいていかになされたのかを確認し、感情労働の観点から探ってみたい。

## (2) 感情労働としてのニュースキャスターの語り

阿部は昨今のナショナリズムを「共感」「情動の共同性」「共振」という言葉を用いて説明した。筆者はテレビニュースにおいて共感を高める機能を果たすのがキャスターの「語り」であると考えている。ニュース後のキャスターコメントやスタジオ内での会話がどのような働きを担っているのかを述べてみたい。

今やキャスターは単にニュースを読む存在から「語る」存在となり、彼らのふるまいは視聴者との親しいコミュニケーションを打ち立て、番組の人気を支える重要な要素となっている(石田, 2003: 258)。さらには、キャスター同士のやりとりが視聴者にニュースの受け止め方のモデルを提示する働きも指摘されている(村松, 2005: 17)。

筆者は、キャスターのふるまいを感情労働と捉え、視聴者の期待を内面化したキャスターが世論やジャーナリズムの理念を準拠枠組み(感情規則)として自らの言動を調整している点を指摘した(深澤, 2015)。この考え方ではキャスターは場面に応じて自らの意識を変化させ(深層演技)、自身を納得させようとふるまいを変化させている存在と捉える。さらには、彼らが視聴者に寄り添い、その思いを代弁することを是とし、「意識の共有」(共感)を目指してニュース内で発話していることも明らかになっている(深澤, 2017; 2018)。この場合、キャスターの語りはニュースと視聴者との橋渡し役を担う。

以上の考え方はキャスターのふるまいのみならず、報道全体にいえることだ。ウォール＝ヨルゲンセンは、共感社会化が進行するなかで、報道が感情労働を外部化し、読者や視聴者の受け手に寄り添って彼らの感情を組み込む形で報道がなされていることを明らかにしている(Wahl-Jorgensen, 2019=2020; 深澤, 2021)。

ウォール＝ヨルゲンセンはまた、ジャーナリストにとって感情労働は①専門的な客観性が求められる場面でそれを実践する方法、②情報源との相互作用を管理する方法の二つによって必要になることを指摘した。①はこれまでジャー

ナリズムが価値としてきた中立や客観性に基づく感情労働であり、②では取材対象者との対人コミュニケーションで求められる感情の管理を意味する。日々の表現活動において、①の観点では、ジャーナリストは「どう表現すべきか」「特定の状況でどの感情が適切か」といった「感情の規則」に従う存在であり、ニュースの言語表現は「高度に脚本化された言語行為」(Wahl-Jorgensen, 2019=2020: 89)という性格を帯びる。この行為は「客観性と感情との複雑な相互作用」となる。この規則にはさらに、受け手の感情的反応の予期に関わる規則も含まれている。

以上をニュースキャスターに援用するならば、テレビニュースにおいてキャスターは直接視聴者に語りかけており、テレビスタジオ内の彼らと視聴者との擬似的な対面コミュニケーションが成立している。キャスターの意識を規定しているのは中立や客観、権力監視といったジャーナリズムの理念である。同時に、視聴者に寄り添う存在として「共感」を重視しており、キャスターは視聴者視線での発話を心掛けることになる。

コロナ禍の五輪では、寄り添う対象は視聴者のみならず、ここまで努力を重ねてきた選手たちも加わることになる。ウォール＝ヨルゲンセンの指摘でいえば、感情労働の②の側面である取材対象者(選手)との感情の管理も必要となり、スタジオ内での「高度に脚本化された言語行為」は「客観性と感情との複雑な相互作用」の様相を呈したといえる。

### 3. 東京五輪をめぐる動きと五輪報道

#### (1) コロナ感染状況と噴出した様々な問題

東京大会の1年延期が発表されたのは、新型コロナウイルスの世界的拡大を受けた2020年3月24日であった。この時点では、コロナは翌年(2021年)には収束しているであろうとの楽観的な見通しが主催者にはあったのであろうが、コロナとの闘いは長期戦を強いられた。

開催前の東京の状況をまとめておくと、2021年6月20日に東京を含む9都道府県で3回目の緊急事態宣言宣言が解除され、組織委員会が観客数の上限を1万人と発表した。しかしながら、6月下旬以降に感染者数の増加傾向が鮮明と

なる。これを受け、政府は7月8日に東京に4度目の緊急事態宣言を出すことを正式に決めた。期間は7月12日から8月22日までであり、これに伴って、東京五輪は異例の無観客での開催が決定した(この後、宣言は9月末まで延長)。

また、開催にこぎつけるまで五輪は紆余曲折を経験した。国立競技場や大会エンブレムの白紙撤回、招致をめぐる疑惑でのJOCの竹田会長の辞任があったほか、組織委員会の森会長は女性蔑視発言で会長職を辞した。さらには、開幕直前になっても開会式の演出メンバーの辞任、解任などが相次ぐこととなった。

## (2) メディアオリンピックとしての東京五輪と世論

こうした問題を経て、7月23日に五輪は開幕となった。無観客での開催で人々はメディアを通じてでしかオリンピックに触れることができなくなり、外出自粛要請もあってテレビ中継は高い視聴率を記録した。ビデオリーチ社の調査によると、五輪開会式の世帯視聴率(関東地区)は56.4%で、NHK総合の生中継をリアルタイムで視聴した人は7061万人に達した(「朝日新聞デジタル」, <https://digital.asahi.com/articles/ASP7V624WP7VUCLV00G.html>, 2022年1月4日アクセス.)

また、2021年8月18日の『朝日新聞』の検証記事では、NHKと民放の地上波の五輪放送時間は880時間となり過去最長となった。開会式の視聴者数は推計7000万人に上る。その一方で、五輪以外のニュース項目は少なくなる傾向がみられた。本稿で分析対象とするNHKの『ニュースウオッチ9』は通常1時間の放送枠が15分、30分に短縮されたほか、競技中継をメインで担当する局ではニュース番組が休止となり、報道番組の量は通常よりも大幅に減ることになった(『朝日新聞』2021年8月18日朝刊, 27ページ)。

この時期、政府の緊急事態宣言のさなかにオリンピックを開催することに批判が集中し、国会周辺では反対のデモも举行されたほか、世論調査では五輪中止を求める人の声が半数以上を占めた。朝日新聞社が2021年7月17、18日に行った調査では、東京五輪・パラリンピックへの賛成は33%、反対は55%となり、「安全・安心の大会」は「できない」が68%に上った(「できる」は21%) (『朝日新聞』2021年7月19日朝刊, 3ページ)。

しかしながら、五輪終了後の新聞社の世論調査をみると国民の多くが五輪開催に好意的な態度を取っている。「五輪を開催してよかったと思うか」「五輪を楽しめたか」という問いに対して、「よかった」「楽しめた」と答えた人は、朝日新聞の調査で 56%、毎日新聞調査で 53%、読売新聞調査で 64%、共同通信調査で 62%と軒並み 5 割を超え、国民の意識は反対が優勢だった大会前から変化した（三橋，2021: 10-11）。

なぜそのように変化したのであろうか。後述するように史上最多の金メダル獲得もさることながら、コロナ禍での五輪という異例の大会であったからこそ世論の変化があったのではなからうか。その点は後述するとして、以下では、当時の報道の特徴について、山腰修三の論考から紹介する。

### （3）2020 東京五輪におけるパラレルワールド

山腰修三は、五輪期間中のメディアの描き方を「パラレルワールド」という言葉を用いて説明した。パラレルとは「二つの事柄が相応して存在すること」（『明鏡国語辞典』）を意味し、期間中の記者会見で IOC の広報部長が、感染拡大と五輪との関係性を否定する際に用いた。つまり、「五輪の世界」と「コロナ禍の世界」の二つの世界が併存し、こちら側の「コロナ禍の世界」では連日感染者数が過去最多を更新するなかで危機にさらされる一方、あちら側の「五輪の世界」はバブルの中にある「安全・安心な世界」であって IOC 委員など特権層によって支えられており、両者は分断されていた。

山腰の問題意識は、「メディア側にどちら側の世界に立っていたのか」という点であり、新聞紙面の 1 面分析から明らかにしている。それによると、朝毎読の全国紙 3 紙は五輪関係とコロナ関係の両方を掲載しており、1 面にはパラレルワールドが展開された。期間中の傾向をみていくと、開会式翌日（7 月 24 日）から 25 日は各紙が五輪関係をトップ記事とした。しかし、26 日に毎日新聞がコロナに切り替えて以降、7 月 29 日から 8 月 6 日にかけてはコロナ禍を重視する傾向がみられた。ただし、この変化は感染拡大に不安を募らせた世論の動向によるものが大きく、いわば「新聞がそうした空気の変化に敏感に反応したと解釈することも可能」（山腰，2021: 21）と結論づけている。

一方、テレビについては、山腰は「コロナ禍の世界」がこの期間中に十分に伝えられたと言い難く、軽視されていた印象を受けたという(山腰, 2021: 21)。コロナについてニュース内で触れていたものの、どれだけの時間、どのタイミングで伝えたのが重要であり、「テレビを通じた『コロナ禍の世界』の伝え方は『五輪の世界』の中に埋没していた」(山腰, 2021: 21)と述べる<sup>3</sup>。そして、五輪報道全体についてはテレビ、新聞等のマス・メディアがこちら側の世界を忠実に表象することに失敗したと山腰は結論づけている。

では、ブリッジ役のニュースキャスターはいかに振る舞っていたのだろうか。その語りを手掛かりに今回の五輪報道の傾向を明らかにしたい。

#### 4. キャスターはいかに語ったか

##### (1) 分析の概要

###### 1) 分析対象

本分析では、NHK ならびに民放キー局で夜に放送されているニュース番組を分析対象とした。期間は 2021 年 7 月 1 日から五輪閉会翌日の 8 月 9 日までであり、このうち、特筆すべき出来事があり、キャスターのコメントの色が出やすい日のニュースを抽出し、録画した映像を再生して内容を確認した。

具体的には、無観客での開催が決まった 7 月 8 日、大会直前(7 月 21 日、22 日)、7 月 23 日の開会式当日、メダルラッシュに沸いた 7 月 26 日、8 月 8 日の閉会日(1 番組のみ)と翌 8 月 9 日の放送である。それ以外の放送もランダムに視聴して報道の傾向を確認したほか、分析結果にも一部反映させている。

前述のとおり、NHK の『ニュースウオッチ 9』は大会期間中、大幅に短縮された。また、NHK はニュース放送後に五輪ハイライトの特別番組を配置しているが、『ニュースウオッチ 9』では五輪関係のニュースを扱うことが少なかったため、五輪期間中の分析は民放ニュースのデータを用いている。また、民放各局においてもこの間はオリンピック中継でニュースが短縮されたり休止する場合が目立った。また、テレビ朝日の場合、『報道ステーション』と同様のコンセプトの『サンデーステーション』が 8 月 8 日の閉会日に放送されており、これらの番組も分析対象とした。キャスターコメントについてはメイン MC のみなら

ず、コメンテーター、スポーツキャスターのコメントも分析対象とした。

なお、本分析で用いるデータは筆者自身が自宅のブルーレイディスクレコーダーで録画したものである。各局ニュースのデータ、以下の分析で登場するキャスターの氏名は表1にまとめた。

表1 分析対象ニュース一覧

ニュース番組名	放送局	放送時間	出演者	備考
ニュースウオッチ9	NHK	21時～22時	田中 正良	記者
			和久田 麻由子	局アナウンサー
			星 麻琴	和久田キャスター不在時担当、局アナ
報道ステーション	テレビ朝日	21時54分～23時10分	富川 悠太	局アナウンサー
			小木 逸平	局アナウンサー
			徳永 有美	フリーアナウンサー
			森川 夕貴	局アナウンサー
			安藤 萌々	スポーツコーナー担当、局アナ
			梶原 みずほ	コメンテーター、朝日新聞編集委員
news zero	日本テレビ	月～木：23時～23時59分、金：23時30分～0時30分	有働 由美子	フリーアナウンサー
			櫻井 翔	タレント
			弘 竜太郎	局アナウンサー
news23	TBS	月～木：23時～23時56分、金：23時30分～0時15分	小川 彩佳	フリーアナウンサー
			山本 恵里伽	局アナウンサー
			村瀬 健介	フィールドキャスター、記者
			石井 大裕	スポーツキャスター、局アナ
			星 浩	スペシャルコメンテーター
			高橋 尚子	スポーツキャスター

※ 放送時間はいずれも平日。五輪中継のため五輪期間中は休止、時間移動や短縮される場合があった。  
分析に加えた『サンデーステーション』（テレビ朝日）は2021年8月8日（日）22時～22時55分の放送。

## 2) 分析の目的と手法

本分析の目的は、キャスターがニュース内でいかにコメントしたかであり、それによって五輪とコロナのパラレルワールドの表象を明らかにする。さらには、その営みを感情労働と捉えた場合の感情規則、つまり、彼らの内面を規定していたものは何かを分析する。今大会では、五輪反対から賛成へと風向きの

変化に少なからずメディア側が寄与したとも考えられるため、大会前と開催期間中とでそのコメントに変化が見られるのかも明らかにしていきたい。加えて、五輪報道のナショナルな側面が指摘されるなかで、キャスターが「私たちの代表」としてアスリートを捉えていたのかを確認する。

なお、分析を試みるのはオープニングトークやニュースを受けてのキャスター一間の会話やコメントである。「受け」コメントはキャスターが感想、意見を表明する箇所であり、その内容はニュースデスクとの事前の打ち合わせに基づき、ある程度用意されていることも多い。ここにニュース番組の主張、考え方が凝縮されていると考えられるため、この部分を重点的に分析する。

## (2) 分析結果

### 1) 五輪前の語りはどうだったのか

先に述べたように、6月下旬以降に感染者が増加するなかで、大会前のテレビニュースは感染者数の増加を伝え、キャスターは視聴者の代弁者として五輪開催への不安、疑問を述べたり政府への注文をつけるスタイルが顕著だった。

以下は、東京で月曜としては多い342人の感染者が確認され、変異株の感染力の強さを上げた7月5日の『ニュースウオッチ9』内のコメントである。インドネシアの深刻な感染状況を伝えた後に、キャスター間で以下のような会話がかわされた（重要な箇所は下線を施した。以下同様）。

#### 【7月5日：ニュースウオッチ9】

和久田：変異株の感染力の強さを改めて実感しますよね。これから東京大会に向けて来日する関係者が増えますけれども、すでに入国した選手団の感染も確認されています。慎重な対応が必要ですね。

田中：はい。そう思います。今週は重点措置の今後の扱いについての判断、それを受けてのオリンピックの観客を話し合う5者による協議が予定されています。政府と関係機関には現状をきちんと判断して国民の命と健康を守る措置を取ってほしいと思います。

7月上旬は人々の気のゆるみが指摘されていた時期で、街中の人出が増えじわじわと感染者数が増えていた。そうしたなかで田中キャスターのコメントはしかるべき対応を取るよう政府に求める内容となっている。この後、無観客開催となることが7月8日のニュース内で伝えられ、7月9日にはその決定に対する人々の受け止め方を放送した。VTRで無観客になったことによる観光業界からの困惑の声を伝えた後、田中キャスターは強い口調で続けた。

【7月9日：ニュースウォッチ9】

田中：……無観客での開催となり、東京オリンピックを新型コロナウイルスに打ち勝った証しにするという政府の目標は難しくなると感じます。国民の間には依然、この状況で厳しい我慢を強いられる中、なぜ、オリンピックだけは開催できるのかという疑問の声も少なくありません。開幕まで2週間、少しでも理解を得られるよう腑に落ちる説明が必要です。

以上のように、コロナ禍での五輪開催への不安を口にし、政府対応のずさんさ、まずさを指摘して政府の適切な対応を求めるのが当時の典型的なキャスターコメントであり、人々の疑念を反映させたものであった。また、無観客開催としながら開会式に別枠で大会関係者が会場に入ることに對する批判の声があった。その際の『news23』でのキャスターコメントを以下に記す。

【7月8日：news23】

小川：お得意様へのチケットこれやめませんかと言いたくなりますし、中継映像に映っちゃうのは困るよと。これそこですかとちょっとズレてるなど思ってしまうんですけれども、星さん、この別枠というのが残るということです。

星：……まあ確かにそのIOCの関係者とかね、お得意様がニコニコして見ている姿を見るとね、チケット当たったのにいけない人からすると頭にきますよね。本当に無観客ということを決めるのであればですね。この関係者もごくごく限定して開催するということを決断すべきだと思います

ね。

このように、大会開幕までは、ジャーナリストとして環境監視機能を内面化したキャスターにとって視聴者の不安が感情規則となっていた。さらにみていくと、開会式に先立って競技がスタートした7月21日の『報道ステーション』では、トップ項目で競技開始を伝え、ソフトボール会場に観客がいないことが強調された。また、大会関係者や選手の感染によって棄権に追い込まれるケースも紹介され、異例の大会であることが伝えられた。そのあとのスタジオではコメンテーターの梶原みずほ氏が以下のように大会の矛盾に言及した。

【7月21日：報道ステーション】

梶原：……なんで我慢しないとイケないのかっていう不満とかもやもや感  
っていうのが残っている。だからこそ、まあ緊急事態宣言下においても  
東京でもなかなか人流が減らないと思うんですね。加えて、選手、そして  
関係者の感染者が相次いでいる。タイミング的にこのオリンピックが  
感染拡大されて悪化させてしまうんじゃないかっていう、そういう疑心  
暗鬼になっても仕方ないなと思いますね。

開会直前のニュースでは、無観客のため歓声がない点や緊急事態宣言下であるためスポーツバーでは午後8時に客がいても閉店せざるを得ないことなどが伝えられ（7月21日『news23』）、通常とは異なる異例の大会であり、感染拡大を恐れる人々が五輪開催に疑念を抱いている点が強調された。

この時期、最も恐れられていたのが医療のひっ迫である。連日、感染者数が過去最多を更新するなかで、五輪の歓迎ムードは低調で、感染が五輪開催によって拡大しないか、バブル方式の穴はないのか、病床数の状態がどうなのかがテレビニュースでは現場の声とともに伝えられていた（7月21日『news zero』）。

そして、先に述べたとおり、開会直前にさらなる問題が噴出する。開会式の演出チームのなかで、過去の雑誌取材で同級生へのいじめを告白していた小山田圭吾氏が作曲担当を辞任したほか、ショーディレクターの小林賢太郎氏がユ

ダヤ人虐殺を揶揄するコントを行っていたことがわかり解任された。この時点では人々の五輪に対する猜疑心は頂点に達しており、そうした不信感を後ろ盾にキャスターは五輪の理念との整合性を問うた。以下が代表的なコメントである。

【7月22日：ニュースウオッチ9】

星：開会式前日の解任直前まで混乱していますね。

田中：本当そうですね。オリンピックの開会式は、東京大会の理念と意義を世界中にアピールする特別な機会です。その制作に携わった担当者が、女性への侮辱や弱い者へのいじめ、あるいは差別や虐殺への理解不足といった問題で相次いで辞めたことは、この大会そのものが人間の尊厳の保持という、オリンピック精神の根幹を理解していないのではないかと疑いを持たれても致し方ありません。開会式を迎えるにあたり、経済効果や派手な演出ばかりを考える前に、私たちは人権感覚や歴史感覚、さらに国際感覚を今一度磨く必要があるのではないのでしょうか。

しかし、五輪開会後は、日本選手の活躍にかき消されるように五輪のあり方を問う声は聞かれなくなり、従来の五輪報道が繰り返されることになる。その背景には、人々が大会運営等の政治がからむ側面とスポーツを楽しむ側面とを切り離し、五輪のごたごとと日本人選手を応援することとを別のことと受け止めたこともある。この姿勢はキャスターも同様であった。7月22日の『報道ステーション』エンディングでの五輪に期待するコメントにキャスター、コメンテーターのスタンスが垣間見える。

【7月22日：報道ステーション】

梶原：……子供たちは多少なりとも自分たちが五輪に関わったっていうちゃんとそういった記憶っていうのは残ってるんですね。なので、ここは大人たちがいろんな違いとか立場の違いを乗り越えて、ひとつになって、ぜひ応援したいと思いますし、やはりなによりも子供たちが大人に

なった時に東京五輪の記憶が良い記憶であってほしい。願わくばその記憶が誇りにつながるようにしていくってというのが、我々大人たちの責任じゃないかと思うんですね。

富川：そして、すでに競技が始まっていますけれども、ソフトボール2連勝しましたし、サッカー男子も勝ちましたし、このまま勢いで日本選手頑張って欲しいって期待するとともにスポーツを楽しみたいですね。

キャスターが述べた「選手を応援したい」「スポーツを楽しみたい」というスタンスは、五輪開催中に、より顕著となる。実際に五輪期間中にどのような報道が行われたのかを以下ではスケッチしてみたい。

## 2) 開会式、開会式当日をどう語ったか

ニュース内で開会式前にみられた不安をにじませた伝え方は開会式当日の報道でも踏襲された。民放主要ニュースは開会式が行われている最中の放送となり、メインキャスターがスタジオにいて、別キャスターが五輪会場前や選手村から立体的に伝える方法や、時系列で出来事を紹介するドキュメント形式が採用されていた（『ニュースウオッチ9』は休止）。

伝え方のトーンとしては、キャスターたちは開幕を喜ぶというよりも、様々な心配、不安を払拭してこの後無事行われてほしいという期待を前面に出していた。以下は『報道ステーション』でのオープニングトークである。

### 【7月23日：報道ステーション】

富川：色々ありましたけれども、オリンピック開幕の日を迎えましたね。

森川：そうですね。1人1人が本当に色々な気持ちを抱えてのこの日になりましたよね。

ニュースではこうした複雑な国民感情を反映させたコメントが聞かれた後に開会式の模様を伝えていくことになる。続いては、現場とスタジオをつないで伝えたTBSの『news23』をみていく。オープニングでは、スタジオの小川キャ

スターと選手村の前にいる山本キャスター、国立競技場前の村瀬キャスターとを結び、現在の様子を伝えた。さらには、VTR内では街頭インタビューを交えて、開幕を楽しみにしていた人々の五輪への複雑な思いがつつられ、観客のいない異例づくめの大会であることが強調された。この後は選手村で好評な段ボールで作られたベッドの話題などを織り込み、番組終了までに何度か「今」の様子を伝えるレポートが挿入されていた。

そして番組中盤のスポーツコーナーでは、アップテンポのBGMが流れ、それまでの小川キャスターによって淡々と進んだスタジオ展開が一変した。国立競技場をバックにした特設スタジオからのスポーツコーナーでは石井キャスターが進行役となり、笑顔で最終聖火ランナーが大坂なおみ選手であったことが報告され、マラソン金メダリストの高橋尚子さんと開会式の模様をVTRを交えて伝えた。

ここで指摘したいのはスポーツコーナーにみられる特有の特徴である。高橋徹はニュース内のスポーツコーナーは他のニュースとは別の区切られた項目として提示され、「騒がしさ」に代表される独特のモードが作り出されていると指摘する(高橋, 2006: 105-106)。高橋はこのモードについて、ニュース番組が提示する現実の合理的な秩序を自明なものとしながら、同時にその秩序を相対化し、スポーツの世界を魅力的なものとする「異化」の力をもつとしている(高橋, 2006: 107)。

東京大会でのスポーツコーナーも同様のモードで伝えられた。それはある意味、コロナが日常となった「こちらの世界」から五輪の「あちらの世界」へと人々を誘い、高橋の言葉を借りればスポーツコーナーという「小さな祝祭」のスペクタクル化を進め、17日間の五輪の期間を「日常」と錯覚させることによって、一時でも「こちらの世界」を忘れさせる意味合いもあったのではないだろうか。こうしたスポーツコーナーのモードは、大会期間中、次第にニュース番組全体を覆うことになる。

この祝祭空間へと導く役割を担ったのがスポーツキャスター、とりわけ元アスリートのキャスターであった。選手の活躍ぶりをアスリートの視点から報ずることは、競技や選手の心理をより深く詳しく伝えられるメリットがあるが、

選手側の心情を理解しているがゆえに選手側の立場からのコメントが多くなる傾向がある。今回のコロナ禍では選手の困難を知っているがために、より選手に寄り添う姿勢が強まったと思われる。

高橋尚子さんは、開会式において日本国旗を持って入場する大役を果たし、そのあとにスタジオ入りして過去の五輪経験を踏まえて以下のようなコメントを残した。

高橋：……今回やっぱり無観客ってこともあって、応援が近くに感じられないかもしれませんが、テレビを通じて泣いたり笑ったり、心をひとつにする。そんな大会になると、もうこれがスポーツの力なのかなというふうに感じました。なんか一瞬一瞬でもね、心に残る。記憶に残る。そんな大会であってほしいなあと思います。

ここで重要なのは、高橋さんが「テレビを通じて心をひとつにする」と語っており、それがスポーツの力だと語っている点である。今回の五輪でも私たちの代表として「選手」は語られ、キャスターは応援団としての役割を担うことになった。以下の石井キャスターのように、取材したキャスターからは決まり文句である「勇気」「元気」に結び付けた発言も聞かれた。

石井：選手たちの表情を見ていると、おーいよいよ始まる。そしてなんかこう仲間たちと過ごしている姿見るとこうグッとくるものがありましたし、なんか勇気をね、もうすでにこの開会式からたっぷりもらったなという感じがいたします。

このように、ニュース内では無観客だからこそメディアを通じての応援が選手の力になると強調される意味づけがなされた。キャスターにとって、コロナ禍で苦しむ人々の世界は事実として伝え、その一方で、努力する選手の姿を全力で応援しようとする姿勢がここから感じられる。

感情労働では、自身の感情にそぐわない場面で、深層演技において自らを納

得させる営みを「健全な切り離し」と呼んでいる (Hochschild, 1983=2000: 215)。まさに、キャスターは、このパラレルワールドをそれぞれ別の世界として描くことで自らを納得させ、コロナを伝えるニュース (こちらの世界) でジャーナリスト然として振る舞うことと、五輪の世界 (あちらの世界) では、国民の一人としてメダル獲得を喜ぶ振る舞いとの使い分けを強いられたのではなかろうか<sup>4</sup>。

世論が二分されている場合、キャスターは自身のスタンスをどうするか苦悩する。東京大会では、キャスターは視聴者側、選手側どちらの立場も理解できるだけに自身のポジションの置き方に逡巡したのではないか。この状況で開催していいのかという思い、人々の不安を理解する気持ち、選手の頑張りを伝えたいという気持ちなど様々な思いが渦巻く五輪だったであろう。それは開会式当日の『news zero』における有働キャスターと弘キャスターのやりとりからも伝わる。

【7月23日：news zero】

弘：無観客だけれども、日本大会で選手として出られるのは本当に幸せなことだと言っていたんですね。こういうご時世だけれども、戦いが始まったら私も純粋に選手の戦いを応援したいなとそう思いますね。

有働：今回の大会やっぱりその感染の広がりが続ける中で、「どうしてやるの」とか、それから「復興五輪の意義はどこに行ったのか、あるいは多様性と調和は本当に考えているのか」っていうこの東京オリンピックへのいろんな疑問、それから不満を抱く方の気持ちが簡単に変わることはないと思います。そしてその気持ちは大切にしないといけないと思うんですけども、ただ、今日の開会式のパフォーマンスをした皆さん、そしてアスリートの皆さんが、このオリンピックに向けて積み重ねてきた努力、思い、そこにはエールを送り続ける17日間であってほしいなあと思います。……こうしたオリンピックの華やかなセレモニーをお伝えした後で、このニュースをお伝えしなくてはいけないのが今年の夏です。

ここでの「このニュース」とは大会関係者のコロナ感染である。パラレルワールドを伝えるコメントからはキャスターの複雑な胸の内を感じ取ることができる。全力での応援と、ジャーナリストとしての問題点を指摘することの両立。以上を目指そうとしたのがこの時期のキャスターであった。それは実際どうだったのか。以下では、五輪開催後のメダルラッシュのなかでの語りについてみていきたい。

### 3) メダルラッシュをどう伝えたか

日本は東京五輪で金メダル27個を含む過去最多の58個のメダルを獲得した。その一方で、この時期に感染状況は悪化し、自宅療養者が死亡するケースもみられた。コロナの世界が深刻度を増すなか、ニュースでは五輪の世界が優勢になっていく。また、従来の五輪報道と比較して、伝え方に変化はなく、選手のメダル獲得を称え、メダリストの幼少期からの生い立ちや家族やチームメイトとの絆、困難の克服などお決まりの感動のドラマが伝えられた。

ここでは、7月26日のニュースを題材にみていく。この日は新種目スケートボードで西矢柊選手の13歳での金メダル獲得が話題になり、柔道の大野将平選手が2連覇した。また、卓球の混合ダブルスでは水谷隼・伊藤美誠ペアが中国ペア相手に大逆転勝利を収めて日本卓球界悲願の金メダルを獲得した。さらには、体操男子団体が銀メダルを獲得するというメダルラッシュの一日であった。以下は、この日の『news zero』のオープニングである。

#### 【7月26日 news zero】

有働：ちょっと心のぴよんぴよんが、興奮が止まらないんですけど、私も。

櫻井：ポイント取るごとに、ああああって声出して、もう疲れちゃいましたよね。

有働：今日も金メダルが止まりません。新種目スケートボードでは西矢柊選手13歳が日本選手では史上最年少での獲得でした。

櫻井：そして、柔道の大野将平選手も、前回の王者ですから世界中から研究され尽くされた中で見事2連覇。本当にすごいなと思いますね。

金メダルラッシュにはしゃぐキャスターの様子は他のニュースでも同様だ。以下は『報道ステーション』と『news23』からの抜粋である。

【7月26日：報道ステーション】

徳永：ほんとにコロナ禍で選手の皆さんは色々な思いを抱えて臨まれていると思うんですけども、まあ本当に努力が報われるようなこの姿、活躍、笑顔を見てると本当に素直に嬉しいです。

小木：コロナ禍で、そして怪我で、まあなんと1年5ヶ月もの間、実践試合に臨むことができなかった大野将平選手がですね。リオオリンピックに続いて見事連覇達成です。

【7月26日：news23】

小川：……心を揺さぶられた方、本当に多くいらっしゃるんじゃないかなと思います。柔道の大野選手、リオオリンピックに続いて2大会連続の金メダルに輝きました。いや、石井さん、辛くて苦しい日々を恐縮したような一日、この言葉にすべてが詰まっていたように感じましたね。

石井：そうですね。本当に見事な優勝でした。大野選手、去年オリンピックが本当はあるはずだったんです。そこから耐えて耐えて、毎日訓練をして掴み取った金メダル連覇ということになりました。本当に素晴らしい。そして少し涙を流すそんな絶対王者の姿も少し新鮮に見えました。

このように、選手たちの努力を賞賛し自分自身のことのように喜ぶキャスターの姿はこれまでの五輪と大差はない。これまでと異なるのはコロナ禍で行われた点である。前述のとおり、キャスターは自らのコメントを発する際に取材対象者にも寄り添う姿勢を取る。今回、「コロナ禍だったからこそ」「苦勞した選手」の思いに寄り添い、その努力をたたえる思いも強まったことが推測される。

また、7月26日の『報道ステーション』で松岡修造キャスターは、選手の言葉の特徴を指摘し、コロナ禍だからこそ強まった「一体感」を強調した。

【7月26日：報道ステーション】

松岡：僕もインタビューしてて、選手たちが共通していることがあるんですね。それは、この状況下の中で、大会、オリンピックを開催してくれてありがとうございますって言うんですよ。なんかこの感謝力っていうのが見てる人たちにも伝わって。会場は無観客です。でも、日本の選手たちは間違いなくみんなと繋がってる。みんなと戦ってるって、僕はそれが、大きな力になってるって感じます。

東京五輪において、選手の口から聞かれたのは感謝の言葉だったという。コロナ禍で開催が危ぶまれているなかで開催してくれたこと、反対意見があるなかでも応援してくれていること等、様々な思いがそこにあると思われるが、この感謝の言葉が一体感を高め、人々の共感を呼び、五輪報道を盛り上げる機能を果たしたのではなかろうか。

こうした点は冷静な判断が求められるキャスター自身も感じていたであろうし、だからこそ先述の「使い分け」を強いられた。7月28日のキャスターの表情、伝え方からはパラレルワールドの併存がみてとれる。この日、東京の感染者は3000人を超えるなど1都3県で最多となり、緊急事態宣言が拡大された。『news zero』では、救急搬送困難事案が増加している危機的状況が伝えられた後、有働キャスターは以下のように深刻な表情で続けた。

【7月28日：news zero】

有働：とにかくご家族やお友達に伝えていただきたいのは、今、大変な怪我や急病になっても救急車がすぐに病院へ運んでくれる状況ではないところがあるということです。自分や大切な人を守るために、今一度周りの方々と感染対策を確認してください。

この後、有働キャスターが視線を一瞬原稿に落とした後、アップテンポなBGMが流れ、彼女は以下のようにコメントし、五輪の話題へと転換した。

有働：そしてオリンピックもおうちで楽しむのが一番ということで、今日はテレビの前で最後のクロール。一緒に腕をかけた方もいらっしやるんじゃないかと思いますが、大橋悠依選手、競泳日本女子で史上初めて二冠となりました。その支えとなった存在とは。

コメント途中から有働キャスターの表情は柔らかくなり、最後は笑顔でVTRへとつなげた。キャスターは両方の世界のありようを感情規則として感情をコントロールし、パラレルワールドを伝えたのが大会期間中であつた。ただし、山腰が指摘したように、期間中にコロナ関連のニュースは連日伝えられていたものの、圧倒的な時間量の差異から五輪の世界に埋没している印象を受けた。

#### 4) 五輪をどう総括したのか

分析の最後に五輪がいかに総括されたのかをみていく。以下では閉会式当日前後の報道を確認し、コロナ禍の五輪をどう位置づけたのかをまとめる。

まずは『サンデーステーション』の閉会式当日の放送内容である。最初の項目は台風9号上陸のニュースで、各地の様子や今後の進路を伝えて警戒を呼び掛けた後、コロナの感染者が東京で4066人を記録し、日曜日としては過去最多を記録したことが報じられ、自宅療養者が増える実態と医療崩壊への懸念が専門家から伝えられた。

続く五輪関連では、オリンピックへの批判的な見方が街頭インタビューで伝えられた後に「安全安心の大会」が開かれたのかを検証する特集が生まれ、アメリカのワシントンポスト紙、フランスのルモンド紙の記者の評価が示された。そのなかで、ルモンド紙の記者が「日本は五輪後にガードを下げ、五輪モードに入った。国民も関係当局も油断してしまった」と語っていたのが興味深い。五輪モードへの移行はメディアも同様であつた。そのベースにあるのは選手を応援する思いであり、以下のコメントがその意識を代表している。スポーツコーナー担当の安藤萌々キャスターが五輪を取材した感想を語った。

安藤：連日取材をさせていただく中で、多くの選手が開催への感謝、そし

で難しい大会だったと振り返っていたんです。大会の延期や賛否の声など、さまざまな難しいがあった中でも、純粹に競技に向き合い、自分のベストを尽くそうとする選手の姿に本当に心を動かされました。

これは取材者として偽らざる感想であろう。選手に近いところで取材している記者、アナウンサーは時に取材対象者と一体化することがある。対象との接近は相手の本音を聞き出せるという良い面もあれば、逆にそれがデメリットとなって批判精神を削られる場合も出てくる。今回は、コロナ禍の五輪で1年間の延長という困難な状況であったがために、選手に心動かされた取材者が選手の頑張り、努力を今まで以上に強調する傾向があった。また、8月9日の『news zero』では、大会関係者、運営する方へのねぎらいの言葉が送られ、「みんな」が支えた大会であったことを印象づけた。

【8月9日：news zero】

有働：競技会場行ってやっぱりあの無観客、本当にここに観客いればと思ったんですけど、その分をあのボランティアの方とか自衛隊の方とかが声をかけあったり、それから拍手を送ったりして、なんとか皆さんを励ましたりしようっていう気持ちがすごく伝わってきました。

櫻井：ボランティアの方々とすれ違うとお疲れ様です、スケートボード会場では出るときには水で次はパリでみたいなことを書いてあったりとか、鹿嶋のスタジアムでは鹿嶋の地元のものをいろいろ用意いただいたりとか、だから本当にたくさんの外国の方をお迎えすることを考えると、ちょっと悔しい思いもあるんですけども、……日々変わるスケジュールの中で、それを対策し運営してきた組織委員会の皆さん、お疲れ様でしたとお伝えしたいですね。

そして、『報道ステーション』で松岡キャスターはこう総括した。

【8月9日：報道ステーション】

松岡：この大会を僕は現場で見させていただいて、最も強く感じた言葉があったんです。それが「ありがとう」っていうものでした。閉会式の時にも、ありがとうって最後出てきましたよね。でも、これは日本から海外に対して世界に対してのありがとうです。でも僕は世界から日本に対してのありがとうってのをいっぱい感じてきたんですね。運営に関して、大会を開催してくれてありがとう。ライバルに対して素晴らしい戦いはありがとう。そしてボランティア、自衛隊、笑顔ありがとう。人と人とのつながりにありがとうっていうのがいっぱいでした。でもこれはそもそも、オリンピックっていうものの良さだと思いますよ。ただ、今回特別なオリンピックだったからこそ、より際立っていた。もう賛否両論あった大会ですが、このありがとうを感じられた。本当に僕は嬉しかったです。世界中のアスリートありがとう。

松岡キャスターはアスリートを代弁する形で彼らの複雑な思いを踏まえて「ありがとう」という言葉を今大会のキーワードに挙げた。前述のとおり、今回はこうした感謝の言葉がアスリートから聞かれたことが大きな特徴であった。「感謝」は視聴者を、さらにはメディアの送り手をも競技へと引き込む働きをし、一体感、共感を強めることにつながったのではないだろうか。コロナ禍の異例な状況で迎えた五輪は、感染状況が深刻ななかで選手の活躍が日本人の一体感醸成を促し、世論の風向きを変える要因となったといえるだろう。

## 5. おわりに：分析からみえてきたこと

本稿では、ニュースキャスターの語りからコロナ禍の東京五輪報道を分析した。その結果、7月23日の五輪閉会まで視聴者に寄り添って五輪開催に不安を示してきたキャスターの語り、日本人選手の活躍に後押しされて従来型の感動重視の応援スタイルの報道に移行し、ニュース内では感染急拡大の実態や大会との関連が開会前ほどには取り上げられなくなった点が確認できた。

今回、五輪開催後は意図的に五輪の世界とコロナの世界を分けて報道されて

いたことが明らかになった。番組内では、五輪開催時までは感染者数の増加に伴い人々が五輪開催不安を抱くさまが伝えられ、ニュースのなかではコロナと五輪が結びつけられて伝えられていた。しかし、金メダルラッシュで日本選手の活躍の場面が増えてくると、その中にコロナ感染の「不安」はそぐわないと感じたのか別建てのニュースとなり、両者は別世界として描かれた。

この変化を感情労働の観点で説明すると、大会前には世論の動向を感じ取って視聴者が置かれている現状を慮り、また、ジャーナリストとしての本義を内面化してコメントしていたキャスターが、期間中はコロナ禍の苦難に見舞われたスポーツ選手に感情移入して応援する気持ちを前面に出した結果が、「手のひら返し」と非難されることになったといえるのではなからうか。

今回の五輪報道に関しては、キャスター自身、どう伝えるべきか逡巡があったと思われる。それらがコメントとして現れたのが本稿で引用したキャスターの言葉であった。しかし、寺島英弥が東京五輪報道について、五輪の興奮、感染急拡大、政治の無責任、この3つのパラレルワールドを本来は一つにつないで人々と共に考えるべきメディアがその任を果たすことができなかつたと結論づけているとおり（寺島、2021: 73）、コロナの世界が十分に伝えられなかつた側面もあった。

パラレルワールドはパラレルのまま交わることはなく、キャスターはこちらの世界では視聴者とともに感染拡大を心配し、あちらの世界では選手と同一化し笑顔で私たちの代表として応援した。ただし、報道量の差異からこちらの世界はあちらの世界に完全に埋没している印象を受けた。一体化の動きは「コロナ禍だからこそ」高まり、選手たちの「感謝」の言葉は人々の共感を呼び、キャスターもその共感に寄り添うことで盛り上げ役を担うことになった。キャスターはそうした感謝の言葉を伝え、まさしく、選手と視聴者を結ぶ橋渡し役、つなぎ役（メディア）としての役割を果たし、国民との一体感醸成に手を貸した。

2021年12月27日に放送されたNHK『ニュースウオッチ9』のなかの2021年のスポーツを振り返るコーナーで、増田明美さんは延期の期間に選手たちがSNSで自らの思いを発信したことによって、「寄り添い方が今まで以上に強く

なっている」「国民みんなが伴走してくれた」と表現した。それを受けてキャスターは「一緒に苦しさを共有できた」とまとめており、SNSを含めたメディアが「私たち=みんなの共感」に基づいた親密な関係性を築く役割を果たしたのが東京五輪であったといえるだろう。

以上が本研究で得た知見である。ただし、今回の分析結果については日本のニュース番組全般に一般化することには慎重でなくてはならない。今回の分析対象は特定の日にちに偏っており、さらなるデータの収集と分析の精緻化が必要であろう。また、昨今は情報番組の司会者やタレントの言葉がネットで拡散され世論形成に寄与するケースも多い。今後は分析対象の幅を広げるとともにネット情報も含めて分析を進めていきたい。

なお、今回はキャスターコメントに焦点化したため、ニュースの内容を詳しく紹介できなかった。大会ではトランスジェンダーの選手の出場や選手たちの人種差別反対行動もあり、掲げられた「多様性と調和」に配慮した特集が組まれていたことは今回の五輪報道の特徴であった。また、海外メディアが五輪をどう捉えているのかを伝えるニュースも目立ち、他者から注がれるまなざしから日本を逆照射する姿勢がみられたことも付記しておく。

※ 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究(C)「共感社会におけるニュースキャスターの役割：コメントの言説分析と意識調査から」(21K01884、令和3年度～5年度)の成果として執筆したものである。

#### 【注】

- 1 日本におけるメディア・イベント研究については、吉見俊哉は五輪のようなあらかじめ予定された特別なイベントのみならず、事件等の突発的な出来事にも適用し、より包括的な概念としてとらえている。吉見は3つの水準での類型化を試みており、第一に新聞社や放送局などのマス・メディア企業によって企画、演出されるイベント、第二にマス・メディアによって大規模に中継され、報道されるイベント(典型例がオリンピック)、そして、第三にメディアによってイベント化された社会的事件を挙げている(吉見, 1996: 3-6)。
- 2 1964年の東京五輪の集合的記憶の構成にはメディアが寄与した側面は大きい。語り草ともなっている日本対ソ連の女子バレー決勝はスポーツ史上最高の61.8%の視聴率を記録した。メディアは大松監督率いる日本チームが厳しい練習に耐えて勝ち取った金メダルを強調し、根性とスポーツが結びつけられて語られるようになったのであり、いわばオリンピ

ックの神話が形成されることになった(杉本, 2020: 13)。これらに代表されるように、メディア・イベント研究では、五輪やサッカーW杯の報道がいかにか国民意識を醸成しているのかに焦点が当てられてきた。なお、昨今では、ネット社会の進展によりメディア・イベント概念は拡張され、パブリックビューイングからゲーム実況まで射程を広げてメディアの媒介機能とネット時代のメディア消費や経験とを結びつけた研究も注目されている(飯田・立石編, 2017)。

- 3 その一例として挙げられるのが、午後4時45分に東京の新規感染者数が発表される時間のテレビの扱いである。そこでは感染者数が速報として伝えられ、専門家の警告も発せられる。しかし、その後すぐに再び五輪の世界へと戻り、「コロナ禍の世界」は「五輪の世界」に塗り替えられる。山腰はあたかも「向こう側の世界」から「こちら側の世界」を一瞥するものであったと表現している(山腰, 2021: 21-22)。
- 4 開催2日前のコメントになるが、以下の小川キャスターのコメントが、キャスターの姿勢を端的に示している。小川キャスターは、選手を応援することと様々な問題点を指摘することを別物と捉えている。

小川：当初の構想を考えると、本当にここに至るまでに色々なことがあったなというふうには振り返るんですけども、今日からいよいよオリンピックの競技が始まりまして、当然ながらアスリートの皆さんの頑張りはもう全力でこれは応援していきながらお伝えしていきたいと思っています。一方で今回は世界が直面する初めてのコロナ禍のオリンピックでもあります。オリンピックをめぐる様々な事象や問題点もこれまでどおりお伝えしてまいります(7月21日『news23』)。

## 参考文献

- 阿部潔, 2020, 『東京オリンピックの社会学：危機と祝祭の2020 JAPAN』コモンズ。
- 深澤弘樹, 2015, 『変容するテレビニュースとニュースキャスターの役割』春風社。
- , 2017, 「地域ジャーナリズムにおける客観・中立公平・公正とは—ローカル局インタビュー調査から—」『駒澤社会学研究』第49号：29-57。
- , 2018, 「ローカルニュースにおけるキャスターの役割・存在意義：地方局の聞き取り調査から」『駒澤大学メディア・政策研究所 年報』第35号：51-84。
- , 2021, 「ジャーナリズムにおける『感情』『共感』を考える」『駒澤社会学研究』第57号：27-51。
- 後藤逸郎, 2021, 『亡国の東京オリンピック』文藝春秋。
- 浜田幸絵, 2020, 「メディア・イベントとしてのオリンピック・パラリンピックの歩みとこれから」日本スポーツ社会学会編集企画委員会編『2020 東京 オリンピック・パラリンピックを社会学する』創文企画：37-54。
- , 2021, 「開催の是非が問われた大会とメディア：1964年への郷愁を超えて」『新聞研究』第838号：24-27。
- Hochschild, A.R., 1983=2000, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, 石川准・室伏亜希訳『管理される心：感情が商品になるとき』世界思想社。
- 本間龍, 2021, 『東京五輪の大罪：政府・電通・メディア・IOC』ちくま新書。
- 飯田豊・立石祥子編, 2017, 『現代メディア・イベント論：パブリック・ビューイングからゲー

ム実況まで』勁草書房.

- 石田英敬, 2003, 「テレビと日常生活: テレビの記号論的再考」『放送メディア研究』第1号: 231-266.
- 三橋信, 2021, 「歴史的な大会にふさわしい紙面を: 賛否渦巻いたスポーツイベントをいかに伝えたか」『新聞研究』第838号: 8-11.
- 村松賢一, 2005, 「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアと言葉2』ひつじ書房: 2-28.
- 杉本厚夫, 2020, 「日本人にとってオリンピックとは: その物語を読み解く」日本スポーツ社会学会編集企画委員会編『2020 東京 オリンピック・パラリンピックを社会学する』創文企画: 5-22.
- 高橋徹, 2006, 「スポーツとニュース」伊藤守編『テレビニュースの社会学: マルチモダリティ分析の実践』世界思想社: 103-123.
- 寺島英弥, 2021, 「理念が霧散した『復興五輪』 危機感と感動が並行した夏」『Journalism』第376号: 72-73.
- Wahl-Jorgensen, K., 2019=2020, *Emotions, Media and Politics*, Polity Press, 三谷文栄・山腰修三訳『メディアと感情の政治学』勁草書房.
- 渡辺武達, 2019, 「メディアイベント」渡辺武達・金山勉・野原仁編『メディア用語基本事典〔第2版〕』世界思想社: 312.
- 山腰修三, 2021, 「対立・分断の五輪報道の果ての『敗北の抱きしめ方』について」『Journalism』第377号: 18-24.
- 吉見俊哉, 1996, 「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館: 3-30.